

特集 家庭教育支援の充実について

～有識者をはじめ様々な方からの応援メッセージ～

白梅学園大学学長
汐見 稔幸



1. はじめに—家庭教育支援がなぜ必要になっているのか

家庭教育は明治期に学校教育が始まったときに、新しい社会・国家において子どもを育てる2つのサイトの1つとして、学校教育とセットで位置づけられた。<家庭教育>という言葉はこのときからのものとされているが、営みそのものははるかに古くからあったと考えられる。極端に言えば人類が家庭を営み始めたときから存在したはずである。その中身には時代が変化してもあまり変わらないものだけでなく、時代とともに変わるものも多い。不易をしっかりと理解しながらも、流行を的確に掴むことも家庭教育の大事な課題になる。

本稿は、現代社会に必要な家庭教育とそのために必要な社会的な支援について検討することが課題だが、その前に、今、なぜ、家庭教育を支援することが大切になっているのかということについてみておきたい。このことの理解の仕方によって、実際の家庭教育支援の内容が大きく変わってくるからである。原因の理解自体が解決策を端緒的に示しているということが、この分野でもまぎれもなく妥当している。

さて、家庭教育機能の低下ということがいわれて久しい。何をもって家庭教育の機能低下とっているのかは必ずしも明確ではないが、この程度の育ては家庭でしっかりしてほしいのにそれができていない家庭が多いとか、子どものためといいながら子どもを実際には追い詰めている家庭が増えている、などという実感を私たちは共有しているのではなかろうか。

こうした家庭教育機能の低下ということが事実だとしても、それがどうして生じているのかという背景の事情については、私たちは必ずしも認識を共有していないように思う。そのため、家庭教育をきちんとできていないのは、たとえば今の親に親としての自覚がなくなったからだというような、個人に原因を求め、個人の思想ややり方に責任を負わせようとするような議論も目立つ。

けれども、そうした個人原因＝責任論だけでは、教育関係者はどうしても親を責め、上から目線でもっとしっかりしてくださいというように対応することが増えることになる。その結果、支援する側の意図とは逆に、親が支援の場から逃げていくことになる可能性が大きくなってしまう。

個人的な経験で恐縮だが、以前、ある私立高校の保護者から録音テープが筆者のもとに送られてきたことがあった。テープは、生徒が喫煙をしたということで全校の親が集められ、生徒指導の教員が親たちに話している様子を録音したものだ。教員は「どうしてこんなことになるんですか？ 皆さんですよ。皆さんがしっかりしないから、こんなことになるのですよ。」と、親たちにヒステリックに叫んでいた。筆者のもとにテープを送ってきた保護者は、この学校では何かあると毎回親が集められこういうことを言われるのだが、生徒に問題行動があってもそれを教育的に解決していくのが学校ではないのか、どうして親を責めてばかりいるのかという疑問を持っていたのであった。こういう風に言われると私たちは教員に何も言えなくなるし、この学校には教員をどこか怖れている雰囲気がある。これでいいのだろうか、先生の意見を聞かせてほしいと言ってきたのだった。

この高校の例は、典型的に、家庭の教育力低下を個人原因、個人責任でとらえようとしたものということができる。こうした発想は、保護者の悩みや不安がある必然性を持って社会的に生じているということ把握していないという点で、厳しく言えば間違った認識を前提としているといえるだろう。間違った認識は間違った対応を生む。おそらくこの学校は、このままでは次第に保護者から避けられていく可能性がある。(ちなみに、この高校は、その後こうした対応の仕方を修正し、保護者との関係をつくりかえようと努力している。)

家庭の教育の実際は、家庭の存在形態がまずあって、それに応じて生み出されるものである。人類は長い間、生まれたところで生き、死んでいった。農業や漁業が主たる産業であった時代はすべてそうであった。その間、基本的に同じ人間関係の中で生きたわけで、その人間関係を濃密に保つためのコミュニケーションスタイルを身につけることが必須であった。また生産性が今に比べるとはるかに低く、生きるために毎日必死に働かねばならないのが日常であった。身体を動かして働くことが嫌いということは原則あってはならず、幼い頃から子どもたちは皆そうした働く親の姿を見てそれに巻き込まれて育った。家庭は消費の場である前に生産の拠点で、しかも電化製品などあまりなくすべて手作りであった。こうした時代には、子どもたちを日々の生産活動の実際にできるだけ早く参加させ、それを担わせなければ家族の生活自体が成り立たなかった。必然、子どもたちに家庭の仕事を早くから手伝わせること、手作りのスキルを伝えることが家庭教育の最大課題であった。

親は日々忙しく働いているわけであるから、子どもの世話を細やかにしている暇はなかった。そのため同居している祖母・祖父にゆだねたり、子ども自身が隣近所の家自由に出入りできるようにして、地域ぐるみで生活を支え合った。家の周辺の道路は今のよう自動車通行空間ではなく人や牛がゆったり往来する多目的空間であった。当然子どもたちも道ばたで自由に遊ぶことができた。必然どこにも子どもの集団（社会集団）ができ、年上の子が年下の子の面倒を見て遊ぶということが日常であった。こうした集団の中で子どもたちは遊びを伝承し合い、親が知らない間に身体力、工夫する力、企画力、社会性、集中心、忍耐力などの人間諸力を身につけた。

家庭の教育というとき、実際はこうした社会生活の担い手に育てることを指していることが多かった。つまり仕事を手伝わせることで、仕事をするを嫌がらない人間に育てること、仕事のスキルを実際に身につけること、道具を大事にするような心性を身につけること等々が行われ、また地域で近所の子たちと自由に遊ぶことで、自主性や社会性、集団規範、企画力、思考力、行動性、忍耐力などが育ったが、それもまた家庭の教育の中に入っていたのである。しかももう少し大きくなれば共同体の祭りを担うことが課題とされ、その練習をしながら次第に責任をもってこうした行事を担う力を身につけていった。これもまた家庭の教育の一環であった。さらにいうと、農業や漁業が中心の社会では、季節の動きに応じたゆったりとした時間感覚を身につけていったので、促成栽培的な価値観、何でも早くという価値観はあまり広がらなかった。1歳の誕生を祝う誕生祝いでよく一升餅を背負わされて子どもがみんなの前を歩かされたが、それで倒れない子は周りから餅を投げて無理にでも倒したところが多かったのは、早く育つ子の危険性を皆知っていたからであった。

昔を懐かしんでこうしたことを取り上げているのではない。それぞれの社会にはそれぞれに応じた育ての様式があり、しばらく前まではこうして子どもを地域社会に「放牧」し、家の仕事を手伝わせるという貴重な（広義の）家庭教育の様式を人々がもっていたことを確認したかったのである。

しかし、周知のように、こうした家庭の育て＝教育スタイルは、高度成長期以降、見事に消失してしまった。労働の中身は多様化し、それに応じて価値観の微妙に異なる世帯が隣近所に住むようになった。家庭は消費の場になり、労働することで身につけた生活スキルや価値観はほとんど身につかなくなった。消費はやがて「差を買う」といわれるように、同じものを買うのではなく、それぞれが違ったものを持つことで個性をアピールする機会となり、人々が異なった志向性をもって生活することを正当化していった。

こうした社会では、親も子どもにどうした価値観をこそ伝えるべきか迷うのは必然となる。家庭は寝るために帰ってくるホテル家族の場となり、転勤などが頻繁にあるため、隣近所と親しい関係を作ることも都会ではためらい始めた。どこでも、地域生活というべきものがなくなっていった。しかも社会を引っ張りつつある企業社会のどこにわが子を送り込むかの競争が家庭の課題となって、共感や共生よりも競争が基本価値観となるような転倒した価値社会が一般化しつつある。社会の変化も激しく、古い価値観では新しい事態に対応できなくなるということも頻繁に起こっている。

こうした社会の中で、自分自身の位置を定めるのに苦労する家族が頻出し、うまく適応できずに家族崩壊に近い状況に陥っているところも少なくない。親身になって相談にのってくれる人を探せなかった人は、困難を個人責任で解決しようとするというもう1つの困難を背負うことになり、転落が加速化することも頻繁である。

こうして、現代の家庭の教育は、社会的な支えと比較的安定した価値思考というバックボーンを失い、ひたすら各家庭の個別課題となっている。外で自在に遊ぶことで子どもの中に豊かに育った身体力や社会性、企画力等は今では全く期待できず、孤立した家庭の中で親が個別責任で育てるものとなってしまっている。しかもその手法は誰からも学べないで自己責任で行うものとなっている。

教育については素人同然の親たちに、子どもたちが地域で遊び回ることがなくとも身体力や企画力、社会性を家庭の中で育てなさいと言っているのが現代社会である。労働の場から切り離れた環境で、ものを大切にする心情や食に感謝する気持ちを育てなさいと言われているのが今の親たちである。競争、競争という価値観の中で、自分の弱さや本音をなかなか出せないで育った親たちに、生命に対する共感力を育てなさいと言われているのが今の家族である。

こうした中で、我が子をどう育ててよいかわからず悩む親、よかれと思ってしたことがあとで子どもには負担だったのだとわかる親、思春期の難しい時期にどう接してよいかわからず、結局子どもの反発だけが大きくなったと嘆いている親等々がどんどん増えているのである。

こうした親が求めているのは、家庭で子どもをどう教育してよいかわからないことが多いので、何とかそれがわかるようなチャンスやうまく教育できるような力を私にほしい、ということに他ならない。また、子育ての悩みを自由に語り合える場や人間関係を求めている人も実多い。なぜなら、家庭の教育はこうすればうまくいくというようなものではなく、臨機応変に自在に考え工夫する力であり、それは同じようなことで悩んでいる人と話し合いヒントをもらうのが一番助けになるからである。

こうして、現代社会は、家庭の教育力を現代的に高めるために、家庭を様々な場で応援することが大きな課題となってきた社会といえる。決して上から目線で、家庭よもっとしっかりせよと叱咤激励することが課題の社会なのではない。社会原因で苦しんでいる世代に、個人責任で何とかしろといっても、できる人は限られている。このことはしっかりとわきまえておきたい。でないとせっかくの家庭教育支援策が、家庭や保護者をかえって追い込んでいくということになりかねないのである。

2. 家庭教育支援の7つの課題

さてやや長くなったが、家庭教育振興のためには、今、家庭で子どもを育てることの大変さを担っている現代の保護者への共感と、彼ら彼女らの必要としていることつまり親としてのニーズの把握が大事であるということを理解いただけたであろうか。支援する方が勝手に頭の中にこしらえた「理想の親像」をベースにして「べき論」で対応しても、親の支援には必ずしもならないということである。

では、現代の親の子どもへの教育にかかわるニーズにはどのようなものがあるのだろうか。こ

ここでは、筆者が長く親支援にかかわってきて感じているものをいくつか順不同になるが、挙げてみたい。

- ① 特に子どもが幼い頃、赤ちゃんの頃のかかわり方のニーズである。1990年頃、バブル経済の影響もあって、いわゆる早期教育がはやりだしたが、その理論となったのは、子どもには刺激をたくさん、早期から与えた方が頭のよい子に育つという神話であった。以来、赤ちゃんにテレビのコマーシャルを見せたり、ドッツカードやフラッシュカードを見せたりということがはやりだした。家庭でも絶えず子どもに何か言ってあげねばならないのではないかと、いう脅迫心を抱いた母親が、子どもの様子に関係なくあれこれ話しかけたり見せたりするということが広がった。

しかし、現代では、子どもは自ら発達していこうとする存在であって、ベビーベッドで横になっている赤ちゃんには、それだけで外の音、部屋の色、光、壁、気温、等々がすべて適度な刺激になっていて、その中で自ら興味を抱き関心を示すものを選択していくということがわかってきている。親がやるべきことは、刺激が過剰ではない比較的静かな環境の中で、子どもを温かく見守ってやることだ、ということが強調されるようになってきている。子どもは必ず反応をサインで示しているはずで、それを読み取ったり聞き取ったりしながら、それにふさわしく反応し返してあげる。こういうことで子どもは無理のない形で育っていくということがわかってきているのである。

したがって、温かく見守るということ、必要に応じて抱っこしたり外に連れ出したりしながら、子ども自身の主体的な活動を保証することがもっとも大事ということをしかりと伝えていくことが、保護者が知りたがっていることつまりニーズに対応することになる。見守る育児の大切さを伝えることである。

- ② ある保育所で、所長が赤ちゃんを育てている若い母親に囲まれて、育児相談に応じていた。そのときある親が「すみません、先生がさっきから言っているくあやす」というのはどういうことですか」と聞いたという。あやし方を知らないのではない。もちろん知らないのだが、そうではなく「あやす」という言葉を聞いたことがなく知らないというのである。このエピソードは現代の親のニーズを象徴的に示している。幼い頃から赤ちゃんと実際に接したことがなく、また育児の実際の様子を見たこともない世代がすでに親になりつつある。だから、「子守歌を歌ってあげて」とか、「もっと身体を使って遊んであげて」と言われても、全くイメージがわからないという人がたくさんいるのである。そうした人が悪いわけではないし、さぼっているわけでもない。そもそも聞いたことも見たこともないことは、やりようがない。だから、現代の家庭教育支援は、親に一定の態度や姿勢を持つようにと直接迫るのではなく、具体的な育児のノウハウを実際に身につけてもらうようにすることが大事になる。「もっと、あやしてあげて」と口で言うのではなく、「今日はイナイナイバーの練習をしてみましょう」とあやし方をからだで覚えてもらうようにすることが課題なのである。そのためには、保護者の育児の様子を支援者がよく観察することが大事になる。そこから一人一人の保護者の課題を見抜き、ニーズを推量していくのである。

- ③ 関連するが、現代の若い親世代は、自身がすでに地域で集団で群れて遊んで大きくなった

という体験や、家庭で親の仕事を手伝いながら大きくなるという経験がなくなっている。その影響で、幼い子どもを育てていても、一緒にこうして遊ぼう、ああして遊ぼうというイメージや、子どもと一緒に何かを作るというイメージがあまりわからないという人が増えている。しかし、幼い子どもにとってもっとも大事なものは、遊びの豊かさということであり、親の仕事を手伝うことによる家族への帰属感の獲得である。そうした世界に子どもを誘い込むための有効なモデルをわが子に示せないまま育児をしている人が多くなっている。

さらに、文化の変容によって、手作りであれこれ作るということも苦手という人が多くなっている。料理が苦手という人もたくさんいる。そこで、たとえばある幼稚園は、子どもを園に連れてきた保護者に、そのまま帰らないで、幼稚園で自分自身が存分に遊んだり、園でなにかを手作りしたりしようと呼びかけている。実際に行ってみると、子どもの数の半分近くの保護者が、園の内外で遊んだり、畑を作ったり、赤ちゃんを連れてきて遊ばせたり、みんなの昼ご飯を作ったり、行事の準備をしたりと活動している。年に何回も開いている遊びの行事では、親が子ども以上に熱心に遊ぶので、園長はそれを見れば今の親のニーズが推量できると言っている。流しそうめんをすると、最後には親がソーメン代わりに流れてくるのだが、そうした遊びができるようになると親は確実に変わると園長は言っている。無邪気に遊ぶことができるようになると、自分自身が子どもに戻ることができ、子どもの気持ちに共感することがもっとできるようになるのではないかというのである。

別の園では、園長が毎週保護者を対象に簡単な料理教室を開いている。食材の多くは園が借りている畑で保護者自身が作っているものである。保護者自身があれこれ活動する部屋が特別に用意されていて、種々の活動をわいわい言い合いながらしている。ここも、親が手作りの力をいつの間にか身につけて成長していく様がよく見えるという。

これらはいずれも、親の遊ぶ力や生活力の獲得、形成への支援であるが、こうして身につくある種のノウハウが家庭での教育力に確実に反映していく。その意味でこうした保護者自身の遊ぶ力の開発や家事能力開発支援も、現代的な家庭教育支援となる。

- ④ 現代は、青年期になっても安定して仕事をできるようになる可能性が十全にあるわけではないという時代である。人生イメージの安定感という点では、次第に低下しているのが現代かもしれない。しかも現代は社会の変化が早く激しいので、たとえば自分の思春期の頃の思い出だけでは、わが子の思春期葛藤の乗り越えを親としてサポートできるとは限らない。変化の速度の早い時代は、子どもにとっては親が自分の将来のモデルにならないだけでなく、親自身にとっても、自分の思い出という育児でもっとも大事な財産が、肝心の育児のモデルにならないのである。

その上、現代の親は、自らの生育過程で子どもの世話をしたことがほとんどなくなっている。ので、わが子の将来を見据えて、この時期にはこれを、あの時期にはこういうことを、という発想がうまくできなくなっている。とりわけ母親中心の育児のため、男の子の思春期以降のかかわり方がよくわからないという人も多い。そのため、子どもとの距離を適当に取らねばならない時期にも近づきすぎて子どもの自立を妨げたり、男の子にも女の子と同じような接し方をするために、男の子がみずからの性的アイデンティティの形成に困難を感じると

いうことも起こっている。草食系という言い方が広がっている背後には、こうしたことも関係している可能性がある。

そのため、現代の家庭教育支援においては、子どもが赤ん坊から、幼児期、少年・少女期、そして思春期、青年期へと成長していく筋道をわかりやすくイメージ豊かに示し、それぞれの時期に親としてなすべき大事なことを了解してもらうことが大切になる。その内容を示す余裕がないが、エリクソンが提示した8つの発達段階のイメージと課題が、筆者の経験では親にはわかりやすいようである。ともかく、見通しが持てないことが、現代の親の育児不安を拡大する要因になっていることは知っておくべきであろう。

- ⑤ 周知のように、わが国の育児は圧倒的に母親中心で、父親が育児家事に参加する度合いは先進国の中で最下位に近い。そのこともあって、父親の育児参加が十年以上国からも強調されてきたのであるが、まだまだ他の先進諸国との差は大きい。最近ワーク・ライフ・バランス（WLB）という言い方で、仕事と家庭のバランスを少し修正するようという働きかけが多くなっている。しかし実はこうした言い方の中にも、問題は父親の自覚であって父親の考えが変われば…という個人主義的な発想が隠れている。実際には、父親は正規の社員になれなくて不安を抱え込んでいたり、正規の時間の賃金下がってきているために残業をせざるを得なくなっていたりと、企業の在り方全体と関連してWLBは決まってくるのであって、父親の個人努力でできることは限られている。家庭教育支援は、そのことをよくわきまえて、その上で個人努力でできることを父親に要求すべきであろう。特に妻が期待しているのは、たとえば仕事から帰ってきたら「今日もご苦労さん」というねぎらいの言葉がほしいということであったり、子どもにがみがみ接している妻を責めるのではなく妻の言い分をしっかりと聞いてあげることであったりする。そのあたりの妻の夫への期待をしっかりと把握して父親支援を展開すべきであろう。
- ⑥ 虐待にしても、DVにしても、育児放棄にしても、子育てで問題になるケースはほぼ例外なく孤立した家庭でのケースである。孤立すると、誰にも相談できないということから来るストレスや、もし今何かあればどうしようなどと考えることから来る不安感がとても強くなって、それがまた育児不安になってしまう。その上、たまったストレスを発散できる場やチャンスがないため、ストレスを子どもに向けてしまったり、ストレスをうまく発散できない自分を責めたりして、ストレスが倍加するということも起こる。そこで現代の育児では親を孤立させないということが戦略的にきわめて大事になっていて、そのための保護者のたまり場づくりやわいわいがやがやできる場づくりということが支援者の課題になっている。小学校の数ほどの気軽なたまり場づくりや預け預かりあうようなことが気軽にできるように保護者にノウハウを蓄えてもらうことも、今日の家庭教育支援の大事な課題である。

ついでにいうと、今挙げた虐待、DV、育児放棄などは、すべて夫婦間や親子間のコミュニケーション不全が原因である。学校でのいじめ、不登校、引きこもり、男性の自殺など現代社会を象徴するような問題のほとんどが、コミュニケーションの問題である。引きこもりや自殺は、困難に陥った子どもや男性が、自分の困難やみじめさを他者に開示できな

いことからくる自尊感の低下が原因になっている。その意味で、これらも重要なコミュニケーション問題のひとつである。

したがって、現代の家庭教育支援は、親世代に対して、交わることを喜びとするようなコミュニケーションが上手にできるようになるための支援ということを含まなければならない。実際の例を出し合いながら集団カウンセリング的な手法も取り入れてコミュニケーションを楽しむような力を身につけていく支援が大事になっているのである。

- ⑦ 育児には、その人のそれまでの全人生が出てくるといってよい。楽しい愛情あふれた家庭で育った人は、それがモデルになるので、自らの育児にもプラスモデルがたくさんあって子育てが楽になる。けれども時代が大きく変わっている中で自分が受けてきた育児をそのままわが子にすることには限度があり、やはり臨機応変に考えてやるしかない。そのときその親の人柄、性格等が全部育児に出てきて、私のような者が親をしていていいのだろうかというような悩みにしばしばぶつかってしまう。子どもが思うように育ってくれないとき、不登校になったようなとき、子どもに障害があることがわかったときなどは特にそうである。もし、自分が育った子ども時代の家庭が問題含みの家庭で、大きくなるまでに様々な育ちの困難を自ら体験した人であれば、その人が親になったときには、そうした負の体験をプラスに転化するということがあわせて課題になる。まさに真剣勝負である。

このように育児はまさにその人の人生全体の振り返りと再評価という営みに他ならず、全体として自分の人生をうまくプラスに意味化できないと、育児に苦しむということが起こり得る。しかし、現代の親の中には子どもの頃からずっとレールを敷かれ、その上をがんばって歩いてきたが、自分で自分の人生を創ったという実感が弱いという人が多くいる。自分で自分を創ったというよりも創らされたという実感の方が強いというのである。こういう場合、子育ての困難が自分の人生のポジティブな意味化の困難と重なってしまうことになる。こういうときに育児不安が極大化する。

そこで現代の家庭教育支援は、家庭で子どもを教育する親自身が自分を語り、自分の人生全体を肯定するチャンスを豊かに与えるということも大事な課題となる。語り合い、聴き合う共同体をどう創出するのかということが課題となるということである。こうした視点もまた、家庭教育支援の現代的な課題である。

以上7点にわたって現代の家庭教育支援の課題を探ってみた。

繰り返すことはしないが、現代家庭の大変さの背景を理解した上で、それでも子どもを育てたいという保護者世代に共感・共苦する支援者の姿勢が豊かな家庭教育支援を生み出していくということだけは理解いただきたい。